

先制医療としての小児の生活習慣病予防のこれから

岡田 知雄

神奈川工科大学 応用バイオ科学部栄養生命科学科

生活習慣病は、遺伝、環境そして生活習慣という三要件から構成されるが、これらがどのように関わってくるのかというと、小児の生活習慣病の進展に関わる三つのステージを考えてみるとわかりやすい。すなわち、一つ目は、胎児期におけるエピジェネティクスの変化が生じる時期、二つ目が、新生児期早期から幼児期の脂肪蓄積が進行するステージであり、この2つのステージは20世紀末に提唱されたDevelopmental Origins of Health and Disease (DOHaD)の概念である。そして三つ目が、狭義の小児の生活習慣病予防として従来から扱われてきた、肥満から様々な合併症へと進展するステージである。これらの各ステージの進展は成人生活習慣病にリンクして行き、また母体の妊娠前・妊娠中における健康状態も生活習慣病の連鎖に大きく関わっており、肥満・メタボリックシンドロームへ偏位する社会集団を形成するのである。われわれ小児保健を扱う職種の役割は、生活習慣病としての個人への対応はもちろん必要とされるが、原発性肥満のスペクトラムの違いを意識しながら、三つのステージの構成概念について理解を深め、それぞれへの対応を模索し、将来の肥満・メタボリックシンドロームへと偏位する社会の形成を阻止し、小児期から生涯にかけて健康的な生活をおくれるように、多職種と協働して行動すべきであると考えられる。